

子代白集上

句集和

載藉所_レ傳。女而秀峙者。其有_レ之矣。至_ニ其修辭也。少也。微也。勿_レ論_下如_ニ斑氏曹大家_一者_上。自_レ此以還屈_レ指可_レ彈。難哉辭也。夫純樸不_レ彫。熟爲_ニ懷措_一。白玉不_レ琢。熟爲_ニ珪璋_一。其斯謂_ニ之死不_レ朽_一。古君子其猶病_レ諸。況女子乎。日本自_ニ紫式部野小町之倫_一。至_ニ清少納言_一。開_レ口成_レ珠。下_レ筆爲_レ章者。于_レ朝于_レ野不_レ匱_ニ其人_一。豈氣運令_ニ之然_一乎。千代尼少々。清淡簡暢。土_ニ木其形骸_一。枕石嗽流。卒意嘯咏。遂斷_レ髮從_ニ釋氏之教_一。自號_ニ素園_一。而益寓_ニ意匠於風月_一。振_ニ奇藻於林澤_一。抑雖_レ非_ニ和歌者流_一。實可_レ比_ニ其悟賞_一矣。每_レ得_ニ一句_一。知與_レ不_レ知。皆無_レ不_レ曰_ニ某所有_一。若_ニ人勉々相_ニ傳口實_一焉。其斯謂_ニ之死不_レ朽_一。然而道聽膚受。前者唱_レ于。而隨者唱_レ喁。則異同不_レ爲_レ不_レ多。是故所_ニ與親善_一者。將輯_ニ刊定之_一。而請_ニ之尼_一。辭曰。我得_ニ之造化_一。卒歸_ニ之造化_一乎。何勞_レ之爲。是以不_ニ上木_一者久矣。白法師悲_ニ其終爲墜_レ地_一。探_レ麗僅得_ニ若干首_一。躬自按_ニ正之_一。將_レ屬制_ニ闕氏_一而語_レ予。我雖_レ未_レ識_レ尼。旣欽_ニ其風韻_一。猶且感_ニ白法師賞心之切_一。以_ニ此言_一冠_レ之云。

寶曆十四年甲申初春

南越勝松田撰



遠き所わさくとのせうそこ、あさからずよろこび入る。やくそくの
 おり、ほ句はよそよとや、げにもをとこめき。御わき殊之外宜。を
 くら堤の句は、人にも聞およびてなされ。外山あきし野、雨のけしき
 も只見るやうにおもしろ。其外もしほらしく、附合は是にてよく。
 かならずや、人になをして御もらひあるまじく。となはぬ所あるを、
 をなごの本情とほめ申事にて。ほ句の事も、藤の花すぐれて面白。
 未畧

うめそ
ふけぬ

うめそ

傳々代々書

墨の江の松は、幾世經ぬらん老木のさかへ、いまに久しく、武隈の松は、千とせの秋や過ぬらん、名のみ傳へて跡もなし。こゝに一木のまつあり。やゝ廿とせの春秋を経て、千代の翠におひさきしるし。いまだ高砂の尾上に、相生の名もあらずとかや。其聲高くひびきて、芭蕉葉のやぶれひさしき不傳の妙音をうたふ事、自然の天籟にかなへり。されど凄々凛烈のつよみなき事は、姫小松の風姿なるべし。ある時、漂泊の蓮二法師、その聲を聞いていへる事あり。必これに斧斤を加ふることなかれ。大道すたれて仁義あり、智恵いでゝ大偽ありと。これこの謂あるべし。おもふに木鐸に圓團の笠をかざり、針鉄に屈曲の繩を張べからずのこゝろならんか。たゞ敷しまの風にさらし、寂くは花柳の妖艶をわすれ、亭くは萩薄の柔弱をはなるべしと。この時千代の功をまつ葉のながくつたえむと、其心を知らしめむと、いさゝかしるしを顯はさむに、

冬からの皺もぬがばやころもがへ

百日の皺もぬがばやころもがへ

寒かりし皺も脱ばや更衣

此ふたつの中に、初韵はおとこまつのかどくしく、一句のつよみともいふべく、寒か

りしといふ聲や、衣の皺を引かへて寒苦の皺を脱たれば、一作の針鉄に曲節ありて、これを松風の上手とはいふべく、これを妙とはいふべからず。冬からの音は姫小松のよはみにして、天然の風聲なれば也。むかしも衣通姫のながれに、小野小町なん此妙音を得たるとかや。抑上手は人を教ふるに尊く、名人は天理をつたふるの靈なり。玄又玄衆妙の門といへる人は、八十章に万理を通じ、明德をあかし止善にとゞまる聖人は、十三經にひろまる。こゝに南無妙法蓮華經の妙は、五千余卷に上ぬりして大自在を得たり。せばむれば芥子の中に入、ひろがれば那由他の大身を現するがごとく、颯とも、瑟とも、風とも、凜とも、四時に流行し、千歳に不易せばこれを蕉門の虚に居て、實にはたらくといふ一傳なりと知るべし。これは是不知して、かしこかれといふにはあらず。しりておろかなれと、そらうその調子をあわせたるのみ。

享保十孟夏上浣

不五舍人宇中誌之

老ぬればやがて死ぬべき身なりと、

すへの世の記念にしるし侍る。

片われのいの字書間や夏の月

いせのふみ

中ねうふうきききき

山吹や柳に水のよどむ頃

此句よし

朝がほの花や木陰のおそろしく

今少見たらぬやうにて又おかし。

木にもものゝこぼるゝ音や秋の風

此句よし。

秋風や仕廻ふて萩に來ては居り

この句は慥ならぬ作にてい。

病後ものに退屈はまゝ、あらまし愚評申進は。かき

ねてと申残は。以上

卯月二十七日

麥林

千代様

千代様

麥林

鶴ひとつ何のこゝろや梅の花
鶯

うぐひすや又言ひなをしゝく
鶯はともあれ爰の初音かな
黄鸝や聲からすとも富士の雪
うぐひすや都ぎらひの竹の奥
鶯やよし野々沙汰に氣もつかず
うぐひすや初音に聞くは幾所
うぐひすや冬其儘の竹もあり
鶯や梅にも問すよそ歩行
黄鳥のものに倦るか竹の奥
うぐひすは人も寐させて初音哉

柳

みよし野に闇一結び柳かな
晝の夢ひとりたのしむ柳哉
青柳や地の果もなき水の上
うぐひすは起せどねぶる柳哉
青柳は何所に植ても靜なり
結ふと解ふと風のやなぎかな

ながれては又根にかへる柳かな

青柳やどちらの世話で水の音
柳から残らず動く氷かな
おそろしき根を耻入て柳哉
手折らるゝ花から見ては柳かな
根を置いてけふももどらぬ柳哉
恵ひ壽の賛

釣竿の糸吹そめて柳まで

八十の賀

百とせに最一眠り柳かな

桑名のわたしにて

見るうちにわすれて仕廻ふ柳哉

かすみ

青柳の朝寐をまくる霞かな

春雨

もえしざる草何くぞ春の雨

春雨やうつくしうなる物ばかり

春雨や土の笑ひも野に餘り

春雨にぬれてや水も青う行

蝶

蝶くや何を夢見て羽づかひ

夢ながら蝶も手折や花戻り

蝶折く扇いで出たる霞かな

たんぽうや折くさます蝶の夢

蝶くやをなごの道の跡や先

わが風で我吹おとす胡蝶かな

飛しうの人に對して

蝶くや裾から戻る位山

五百年の法會

をしなべて聲なき蝶も法の場

猫戀 淡雪

聲たてぬ時がわかれぞ猫の戀

ふみ分て雪にまよふや猫の戀

淡ゆきや幾筋きえてもとの道

風巾 霞 山吹

吹くど花に欲なし風巾

鳥は音に跡先さそふ霞かな

山吹や柳に水のよどむころ

山吹のほどけかゝるや水の幅

木のもととは翌の事也はつ霞
地に遊ぶ鳥は鳥なり初がすみ

文臺のうら書

初がすみたつや二見のわかるほど

若水

わかみづや流るゝうちに去年ことし

若水や藻に咲花も此雪

若みづや迷ふ色なき鶯の影

万歳

万歳やもどりは老のはづかしく

萬歳の口や眞砂は盡るとも

人日

七草やつれにかえ合ふ草もあり

道くさも數のうちなり若菜摘

人あしに驚も消るやわかなの野

若菜摘けふより花の道廣し

七種のひゞきからある水の音

仕事なら暮るゝおしまじ若なつみ

手の跡を雪のうけとる若菜かな

花までは出惜しむ足を若菜哉

ひとつ家も摘出す雪の若菜哉

七くさや笠からは目の地につかず

七草やあまれどたらぬものも有

一いろのあまりは白き若な哉

七くさや都の文を見る日數

なゝくさや我は背戸にてよみ盡し

風の手につふまで入ぬわかな哉

七草や雪を拂へばそれでなし

白い手の鳥追もあり若菜畑

山彦はよ所の事なりわかな摘

鶴の畫賛

人音を鶴もしたふて若菜哉

梅

梅咲や何が降ても春ははる

梅が香や風のあいゝ木にもどり

梅の花咲日は木ゝに雪あり

むめがゝや百もかほ出す雪間より

梅がゝや戸の開音はおぼえねど

咲事に日を撰ばずや梅の花

梅がゝや尋ぬるほどの枝にさへ

梅が香や鳥は寐させてよもすがら

文臺のうら書

梅の月浪の間にゝ二見かな

梅が香やとに月夜の面白し

梅がゝや谷へむかいに行戻り

仇を恩にて報ずるといふ事を

手折らるゝ人に薰るや梅花

追悼

梅ちるやまつのゆふ邊も秋の聲

梅花佛手向

なごりゝ散までは見ず梅の花

梅がゝや朝ゝ氷る花の陰

梅咲や水さへ水にならぬ折

梅がゝや何所へ吹るゝ雪女

大黒の繪賛

有手からこぼれ初てや梅花

繪賛 三章

もどかしや香はとゞけどもんめの花

梅がゝにつれ立日さへまだ寒し

ながれ合ふてひとつぬるみや淵も瀬も
するの世にながれてぬるみ増りけり

櫻

あしあとは男なりけり初櫻
初はなやまだ松竹は冬の聲
明ぼのゝさくらに成て朝日かな
どち見むと花に狂ふやよしの山
けふ來すば人のあとにか初櫻
唯かへる心で出たにはつざくら
見て戻る人には逢ず初櫻
むすばれて蝶も晝寐や糸さくら
明ぬれどいよく白し初櫻
影は瀧空は花なりいとさくら
月の夜の櫻に蝶の朝寐哉
何にすれて端く青し山さくら
潜るとて剃はせねども山櫻
晚鐘を空におさゆるさくらかな
短冊は風をあつかふさくら哉

花は櫻まことの雲は消にけり
見る人も鹿相ななりや初さくら
ふか入のした日の脚や山さくら
花もりや人の嵐は晝ばかり
だまされて來て誠也初さくら
女子とし押てのぼるや山さくら
見ぬものを見るより嬉しさくら花

奉納

うち外を鳥の仕事や神の花

畫贊

道くさに蝶も寐させぬ花見哉

桃花

富士の笑ひ日にく高し桃の花
それほどにかはかぬ道やものはな
よし野から鳥も戻るや桃の華
桃咲やよしのゝこゝろ捨てから
里の子の肌まだ白しもゝの花
桃咲や幾度馬に行あたり
隠れ家も色に出にけり桃の花

もゝさくや名は何とやらいふ所

富士見にまかる人に

桃の色目におさまりて富士見哉
戸の開てあれど留守也桃の花

沙干

青柳のけふは短きしほ干かな
拾ふものみな動く也鹽干海
海士の子に習らはせて置沙干哉
蝶くつまでてゝ居るしほ干かな

雛

雛もちや雛のかほも戀しらず
轉びても笑ふてばかりひゝな哉
とぼし灯の用意や雛の臺所

臘月

穴の明松風もなし臘月
おぼろ夜やそれではなふて人は人
拂ふ事松もかなはず臘月
臘夜や見届たもの梅ばかり
おぼろ夜や松の子どもに行あたり

言さして見直す人や朧月
朧夜やうたはぬ歌に行過し
世の花を丸うつゝむや朧月

雉子

きじ啼て土いろゝの草となる
若くさや尾の顯はるゝ雉子の聲
耳遠い事もあるかきじのこゑ
隠すべき事もあれ也雉の聲

雲雀

ふたつみつ夜に入そうな雲雀哉
折ふしは雲のうしなふひばりかな
てふゝは寐てもすまずに雲雀哉
草むらの留守に風置雲雀哉
あがりては下を見て鳴ひばりかな
ある折はうそにも落て雲雀哉

鶯贊に

身あがりや雲雀の籠も地に置す

燕

乙鳥来てあゆみそめるや舟の脚

鶯贊

舍りして筈とはならぬ燕かな
蛙

雨ぐもにはらのふくるゝ蛙かな

鳴雲雀呼戻したるかはず哉
踞はふて雲を伺ふ蛙かな

養生濱といふに

蛙鳴てその養ゆかし濱つたひ

若艸 鶯贊

若くさや胸の寐起もうつくしき

送別

若くさや歸り路はその花にまつ

祖師五百年御忌法會

地も雲に染らぬはなきすみれ哉

駈出る駒も足嗅ぐすみれ哉

松花

吹つもの塵出なをして松の花

あいさつに

二むかしつもの目はなし松の華

隠居をとぶきて

囀りを世にや譲りて松の琴

閑かさは何の心や春のそら
下萌や水仙ひとり立しざり

送別

見送れば墨染に成花になり

藤花

藤のはながふて連におくれけり

鶯の聲もさかるや藤の花

おそろしのよりやもとりて藤の花

まつかぜも小聲になるやふぢのはな

あそびたい心のなりや藤の花

地にとゞく願ひはやすし藤の花

更衣

花の香にうしろ見せてや更衣

綿ぬきや蝶はもとより輕くし

わたぬきやはじめて夜着のおそろしき
綿脱やまだ朝くうそもあり
脱捨の山に(と)つものや更衣
おもたさの目にあつまるや更衣
冬からの皺をぬがばや更衣
二日三日身の添かぬる袷かな

餞別

日はながし卯月の空もきのふけふ

卯花

うのはなは日をもちながら曇り曇
卯花や垣の結目も降かくし
うのはなの闇に手のつく若葉哉

牡丹

垣間より隣あやかる牡丹かな
水に添はまた名もあらむ白ぼたん
蝶くの夫婦寐あまるぼたん哉
指折ば翌へもかゝる牡丹かな

衣通姫の賛に

ゆふかぜに蜘蛛も影かる牡丹かな

杜若

水の書水の消したり杜若
萍の身はまだおもしろきつばた
行春の水そのまゝや杜若
をうなの身まかりけるに
雲のゆかりそれかとばかり杜若

池佛

灌佛や露の若葉もあゆみそめ
蚊屋つりの草もさげてや花御堂

若葉

晚鐘に雫もちらぬ若葉哉
日の脚の道付かへる茂りかな
葉櫻や知らぬむかしのものに成

行ミ子

むさし野に聲はこもらず行ミ子

諫鼓鳥

淋しさは聞人にこそかんどり
分入ば風さへきえて諫鼓鳥

箏若竹

竹の子やその日のうちにひとり立

餞別

若竹と成て千里も遠からず
風毎に葉を吹出すやとし竹
若竹の風は日にくかわりけり
わかたけや雀の耳に這入る時

婦人の追悼

そのわかれ浮艸の花けしの花

郭公

鶏の聲つもりし耳やほととぎす
ものゝ音水に入夜やほととぎす
あすの夜は寐させてくれよ蜀魂

畫賛

音をいかに雲井にむすぶ郭公
起ぬがる鳥もあるべし子規

風人にたづねられて

木々の間植ても置す杜宇

あいさつ

道くに残した聲や蜀魂

きぬくのあちらにはなしほととぎす
男さへきかれぬものをほととぎす

唯置て枕の塵や杜鵑

おもひ切てこちら向時ほととぎす

唯もどる道ながくし時鳥

子規閑入の口もとぢて置

百合

姫ゆりやあかるい事をあちら向

ひめ百合や姿見をする子供から

水鶏

水音は水にもどりて水鶏哉

螢

下闇に居りわすれてや飛螢

しのゝめやとめし螢を置忘れ

川ばかり闇はながれて螢かな

芙

花と針の心問たき芙かな

菖蒲

降らひでもぬるゝ名のあるあやめ哉

音ばかり算失なふあやめ哉

澤にあるうちは名だゝぬ菖蒲哉
風よりも雫のものぞ軒あやめ

五月雨

短夜のうらみもどすや五月雨

田植

まだ神のむすばぬも出て田植哉

つれよりも跡へくと田うへかな

田うへ唄あしたも有に道すがら

けふばかり男をつかふ田植哉

早乙女やわかな摘たる連も有

夕顔

ゆふがほは朝くもどるさかり哉

夕顔や女子の肌の見ゆる時

ゆふがほや物のかくれてうつくしき

あいさつ

ゆふがほの宿や茶の香も水くさき

紅花

あつき日や指もさゝれぬ紅畠

涼風の遣入て見えぬ紅畑

こぼれては常の水也紅の露
短夜のつる花かや紅ばたけ

山蔭やこゝもとの日は紅の花

暑

あさの間は空にしられぬ暑さ哉

塩竈のほそふ立日はあつさかな

晩鐘に散残りたる暑さかな

來て見れば森には森のあつさ哉

萍 藻花

うきくさや蝶のちからの押へても

蘋を岸に繋ぐや蜘蛛の糸

浮艸に我は根の付涼みかな

萍やとりおとしたる咲所

藻花や濡すにあそぶ鳥は何

氷室

涼しさや氷室の雫くより

蓋とりてつめたきかさや氷餅

蟬

初蟬や風にも用のある日から

せみの音やかからはその根に有ながら
松風もをのがのにして蟬の聲

納涼

松の葉もよみつくすほど涼けり
涼しさや梢／＼の吹あまり
涼風や押れ合たる草とくさ
すゞしさや手は届かねど松の聲
涼しさやあるほど出して鶯の首
影坊の森ではぐるゝ涼かな
唐崎の晝は涼しき雫かな

送別

道もその道に叶ふてもの涼し
涼しさや耻かしいほど行戻り

八十の賀

涼しさやとに八十年の松の聲

ひよ子の賛

子の闇に鶏も迷ふやゆふ涼

あいさつ

涼風の植所なき住ゐかな

伊勢の人に對して

あいさつはうちとの風でしまひ晷

白雨 延の日和山にて

ゆふだちの道よりもなし日和山
夕立や卒爾な雲の一とをり

雲峯

眼にさわる鳥は消たり雲の峰
松風を植て聞たしくもの嶺

あいさつ

仰むけばきれいにあつしくもの峰

送別

何里ほど我目のうちぞ雲のみね

清水

山のすそ野ゝ掘むすぶ清水かな
青／＼と見えて根のある清水哉

暫の旅に赴きし人

道くさも手のうつくしき清水哉
紅さいた口もわするゝしみづかな
行さきで又我に逢清水哉
手あくれば結びめのなき清水哉

近道を來て日の足らぬ清水哉

目にむすぶ谷間／＼の清水哉

都のかたへ旅だつ人に

おくらばや清水に影の見ゆるまで
近道によき事ふたつ清水哉

結ぶ手にあつさをほどく清水哉

眞如平等

清水には裏も表もなかりけり

夏の月

釣竿の糸にさはるや夏の月

ちよんたるふ

千代尼句集 坤

初秋

蚊屋の浪かほにぬるゝや今朝の秋
秋たつやきのふのむかし有の儘
これこそと何も見初めず今朝の秋
萩の葉のものの言かほやけさの秋
琴の音の我にかよふや今朝のあき
秋たつやはじめて葛のあちら向
初秋やまだうつくしい水の音
はつあきやまだ顯はれぬ庭の色
秋立や風幾たびも聞直し

かたびらの襟にはくさし萩の音

残暑

萩の聲のこるあつさを隙で居る
秋の部へこぼれてはへる暑さ哉
朝の間はかたづいて居る残暑哉
はじめてのあいさつに

文月や空にまたるゝひかりあり
文月の返しに落る一葉哉

七夕

萩も穂に出るやほしのおそびより
ほし合や心して行雲の脚
かさゝぎや別れの橋は懸ねども
朝がほや星のわかれをあちら向
夕顔も寐るやくそくぞほしまつり

ほし逢や月入までは何の蔭
鶺鴒もねぶたき筈の八日哉

朝顔

牽牛花やまだ灯火の影も有
あさがほや鳴所替るきりくす
朝がほや起したものは花も見ず
朝顔は蜘蛛のいとも咲にけり
萩の花や木陰のおそろしき
あさがほはその日に逢ふて仕廻
牽牛子やをのが蔓かと蔦に咲
あさがほや誠は花の人ざらひ
朝がほや裾は日もまつ草の花
あさがほや草臥直る夜は持ず
朝がほや夏の夜ならば夢の内
朝顔に釣瓶とられて囉らひ水
稲妻
いなづまも鴉の聲にわかれけり
稲妻や何にしるしをつけて行
いなづまの裾をぬらすや水の上

草の花 花野

蝶くゝの身の上しらぬ花野哉

畫贊 二章

蘆間から風の拾ふや捨小舟
蘆の葉にすはらぬ尻となりけり

文臺のうら書

よしあしの穂に顯はれて二見哉

千種貝の題にて

波のうへに秋の咲なり千種貝

送別 三章

日和く道は薄の雫まで

下冷を咲あたゝめよ道の艸

見送るに目のはなされぬ花野哉

どう見ても春散種や草のはな

秋風のいふまゝに成尾花かな

草の戸や手によごれたる花も咲

畫贊

雉子のつま隠し置たる薄かな
晚鐘に幾つか沈む尾花哉

桔梗の花咲時ボンと言そうな

川音の晝はもどりて花野哉

あいさつ

千秋を咲むすびてや草の庵

秋の野や花となる草成らぬ艸

明てから薦となりけり石燈籠

鶏頭やならべてものゝ干て有

鶏頭やまことの聲は根に遊び

剃髪の人

塵と見て露にもぬれそ萩の花

秋風 虫

木からものゝこぼるゝ音や秋の風

行水にをのが影追ふ蜻蛉哉

虫の音に心も置ず降夜かな

脱捨の笠着て啼やきりくす

虫の音や野におさまりて庭の内

良夜

名月や人に押合ふ鳥の影

明月や雪間(?)につもる水の音

名月やよし野ゝ葉にも咲あまり

名月や行てもくよその空

名月やはづかしの森いかばかり

明月や白きにも似ず水の音

晚鐘の耳失ふやけふの月

名月や眼に置ながら遠歩行

畫贊

きぬくは月にもありて明をしみ

名月や手届きならば何とせむ

何着てもうつくしうなる月見哉

名月や鳥も寐ぐらの戸をさす

月見にも陰ほしがるや女子達

名月や闇を尋ぬる鳥もあり

月の夜や石に出て啼きりくす

人中を潜る欲なき月見哉

名月の舟やあそこもこゝもよし

舟からはちかしとむかふ月見哉

名月やあかるいものに行あたり

名月や何所までのばす富士の裾

名月や留主の人にも丸ながら
うら町の軒あかるしけふの月

名月や唐崎の雨明てから
あかるふてわからぬ水やけふの月

硯の題

名月やそのうらも見る丸硯

石山書贊

名月や雪踏分て石の音

十六夜

いざよひや今あそこにて見ゆる雁

十六夜や囁く人のうしろより

いざよひやいざよいと言葉ぬうち

十六夜の闇をこぼすや芋の露

いざよひの闇や耻かく人もあり

初鴈

はつかりや通り過して聲ばかり

初雁やならべて聞はおしい事

はつ雁や山へ配れば野に足らず

初雁や聲あるものを見失ひ

はつ鴈や見捨てた花を草の時

鶉

聞人の目の色狂ふ鶉から

賣られても秋をわすれぬ鶉哉

縫物に針のこぼるゝ鶉かな

蒲 菊

雪かと鳥もあやぶむぶどうかな

菊

蘭の香にあそぶ日はなし菊の花

菊畑やけふ目に見ゆる足の跡

咲花をいくらか捨てけふの菊

菊咲て餘の香は草に戻りけり

白菊や紅さいた手のおそろしき

菊咲てけふまでの世話わすれけり

きく畑や花の行衛は雲井まで

菊の香や茶に押合ふも此日より

朝／＼の露にもはげず菊の花

菊畑や夢にイむ八日の夜

けふばかり見てすむものを菊の花

しら菊や寒いといふもいへる頃

けふに成て草臥おかし菊作り

今日のきく獨咲ではなかりけり

しら菊や日に咲ふとはおもわれず

子ども手になふ盛りや菊の花

後 月

影坊も出ては隠るゝ後の月

しかられた畑も踏よし後の月

のちの月始めてせばきいろりかな

とり残す梨のやもめや後の月

たち盡すものはかゝしぞ后月

山彦は背に戻るやのちの月

瓢

夕顔の身は持にくしあきの風

三界唯心

百生や夢一すじの心より

約束を何／＼持や種ふくべ

一瓢菴にて

九十九をよ所に持たる瓢かな

花や葉に耻かしいほど長瓢
行秋の聲も出るや瓢から

紅葉

木陰から出て日の暮る紅葉哉
ゆふぐれを餘所に預けてもみち哉
折くは霧にもあまる紅葉哉
色に出て竹も狂ふや薦紅葉

饒別

闇からぬ空はともあれ初もみち

鹿

水の色赤うなりてや鹿の聲
夕ぐれを引あつめてぞしかのこゑ
獨聞我にはほしき鹿の聲

礎

苔添ふて雨にしづまる礎かな

案山子 鳴子

冬瓜の枕さだむるかゝしかな
風の日は餘所の仕事を鳴子哉

鳴笛書

鳴たつやよそのわかれに暮まさり

遠忌

百とせのその日も鳴のゆふべ有

暮秋

行秋や持て來た風は置ながら

山代の温泉にて

温泉の山や秋の夕部はよその事
行秋やひとり身をもむ松の聲

時雨

降さしてまた幾所か初しぐれ
柳にも雫みじかしはつしぐれ
日の脚に追はるゝ雲やはつしぐれ
その中に唯の雲あり初時雨
水鳥の背の高う成しぐれかな
松風のぬけて行たるしぐれ哉

此うへは白きものとてしぐれけり

初しぐれ風もぬれずに通りけり

まだ鹿の迷ふ道なり初しぐれ

京へ出て目にたつ雲や初時雨

九重の人も見え透しぐれ哉

田はもとの地に落付や初時雨

きのふけふあしたは只のしぐれ哉

畫贊

仰向て見る人もなきしぐれ哉

歸花

みよし野はよその春ほど歸り華

春の夜の夢見て咲や歸花

明ぼのも暮の姿やかへりばな

寐た草の馴染はづかし歸り花

咲くも果はうそなり歸花

落葉

見らうちに月の影減る落葉哉

落葉まで風の物とや持歩行

水のうへに置霜流す落葉かな

寒山の賛

隣りくわからぬものは落葉哉

冬 枯

冬枯やひとり牡丹のあたゝまり

枯 野

鶯の雪降さだめなき枯野哉

いろくを石に仕あげてかれの哉

枯野行人や少さう見ゆるまで

枯尾花

決定心

根て切て極樂にあり枯尾ばな

安心

ともかくも風にまかせてかれ尾花

大根引 蕪

道くさの草にはおもし大根引

降ものに根をそゝぎたる蕪哉

手のちからそゆる根はなしかぶら引

風 小六月

こがらしやすぐに落付水の月

似た事の三つ四つはなし小六月

紙衣 火燧

待暮も曙もなき紙衣かな

尼になりし時

髪を結ふ手の隙明て巨燧哉

冬の鳥

こぼれては風拾ひ行衛かな

三つ五つまではよみたる千鳥哉

池の雪鴨やあそべと明て有

花にとは願はず雪のみそさゝる

吹たびにあたらしうなる千どりかな

山彦の口まね寒きからす哉

拂はぬはをのが羽とや雪の鶯

鳥影も葉に見て淋し冬の月

霜 經 寒

夏の夜のちぎりおそろし橋の霜

水にうくものとは見えぬ靱かな

朝の日の裾にとゝかぬ寒さ哉

水仙

水仙の香やこぼれても雪の上

水仙は香をながめけり今朝の雪
水仙は名さへつめたう覚えけり

冬 梅

冬の梅咲やむかしのあたゝまり

折く日のあし跡や冬のむめ

雪

初雪や見るうちに茶の花は花

聲なくば驚うしなはむ今朝の雪

初雪や鴉の色の狂ふほど

はつ雪やほむる詞もきのふけふ

はつゆきや落葉拾へば穴が明

初雪や麥の葉先きを仕廻かな

はつ雪は朝寐に雪見せにけり

はつゆきや子共の持て歩行ほど

初雪や水へも分ず橋の上

はつ雪や降おそろしう水の上

初ゆきや風のねぶりのさむるまで

初雪や根の付さうな竹の間

はつゆきは松の雪に残りけり

そつと来る物に氣づくや竹の雪
しなわねばならぬ浮世や竹の雪
吹事をわすれて見るや竹の雪
青き葉の目にたつ頃や竹の雪
花となり雪となるや今朝の雪
雪の有ものにきかすな松の聲
つめたさは目の外にありけさの雪
手をうちていやそちでなし竹の雪

あいさつ

取あへず塵に敷けり今朝の雪

五百回御忌

東御門跡へ上る

葉も塵もひとつ臺や雪の花

鉢扣

山彦をつれて歩行や鉢たゝき
鉢たゝき夜毎に竹を起しける

臘八

臘八や流るゝ水も物いはす

餅花

けふばかり背高からばや煤拂
散事を待とはおかし餅の花

歳暮

行としやもどかしきもの水斗
閏月のそのめも見えず年のくれ
朝起もひとつに年はくれに覺
行としや連だつものは何と何
としの尾や柳に青ふ結び行

年内立春

としのうちの春やたしかに水の音
年のうちの春やしらすに行もあり
着よごしたなりに春とやとしの内
十のものの幾つの春ぞ年のうち
春めかぬ詞づかひやとしの内
おもひ出した様な春なりとしのうち

帯も袂も裾にひとしく、又平が繪
 修に藤の花もたせし頃より、其名あ
 まねく、あめがしたに聞へければ、
 しらぬひのつくし人も、鳥が鳴あ
 づま人も、此尼の風流をしたはぬ
 はなき世とはなりけらし。いでや
 句の姿は、あはれなるやうにてつ
 よからず、いはゞよきをうなのな
 やめる所あるに似たりと、古人の
 詞のどくつよからざるはをうな
 の句なればなり。今老の身のおほ
 す、あはれなる蕉風のうたふ、
 けしき、あはれなるは、あはれ

帯も袂も裾にひとしく、又平が繪
 に藤の花もたせし頃より、其名あ
 まねく、あめがしたに聞へければ、
 しらぬひのつくし人も、鳥が鳴あ
 づま人も、此尼の風流をしたはぬ
 はなき世とはなりけらし。いでや
 句の姿は、あはれなるやうにてつ
 よからず、いはゞよきをうなのな
 やめる所あるに似たりと、古人の
 詞のどくつよからざるはをうな
 の句なればなり。今老の身のおほ
 げなるすゑまでも、かく蕉風の

之の中にも、新黄のめ、
 一、源を、遠く、
 句を、書、つ、を、ぬ、き、ま、の、は、め、
 事、あ、る、人、の、お、も、た、る、人、の、
 事、あ、る、人、の、お、も、た、る、人、の、
 ち、り、と、ま、る、代、尼、句、集、と、
 ま、は、る、お、も、た、る、物、の、
 ま、は、る、後、序、を、書、き、

寛政十三年癸未初冬

加州金陵 半化坊



いとすじをみださる事を、つね
 ど、かんじあへる中にも、無外、
 のぬし、したしみ深く、遠近にちり
 みだれたる句を書あつめぬれば、
 をのづからすける人々のかゝみ
 ともなるべき事おほければとて、
 しきりに櫻木にちりばめて、千代
 尼句集と題するもの也と、法師の
 物がたり有しまゝに、後序に筆を
 つく。

寶曆十三年癸未初冬

加州金陵 半化坊



サハ一之全	既白選	多~~~~~全	加全協 麦水曜
他分全	同	月あ~~~~全	半化坊評
夕日爲全	同	ふ代尼夕集	既白校 全一冊
北時雨 加全協	如本選	舊門 出本	同

白王都書林

二条寺四

徳屋活古儔

部書林

銀座二丁目

山崎金兵衛

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100